



植柳の風

八代市立植柳小学校 校長室便り
平成29年12月25日 NO. 77

不易と流行を問い直す

22日(金)の昼休み、体育館では子どもたちの歓声が響き渡り、縦割り班による集団縄跳びが行われた。運営委員会が企画し、代表委員会で提案して実現したものであるが、縄のまわし手を務める上級生が、低学年の児童が跳びやすいようにタイミングを取りながら回す姿がいじらしかった。そして、多くの児童がひっかかる場面もあったが、それでも臆することなく、チャレンジし続ける様子を目を細め見ている。普段は、学年や、学級内の交流の機会が多い学校生活で、このように縦割りで触れ合う時間は貴重である。高学年は下級生のことを思いやり、下級生は、上級生になった時の自分の姿を想像させ、憧れを抱く。こういった世代を超えた人と人との触れ合いが、学校でしか味わえない醍醐味であるし、これまで受け継がれてきた学校の存在理由の一つと言っても過言ではない。



さて、23日(土)から24日(日)にかけて、佐賀市で開催された「全国個を生かし集団を育てる学習研究大会」に参加してきた。大会主題は、「集団学習の不易と流行を問い直す～“明日が楽しみ”学校・学級づくり～」全国から120名を超す幼稚園・小学校・中学校の教職員が集い、授業づくり、仲間づくり、心づくりなどの分科会や新学習指導要領を考えるシンポジウムなどで熱い議論を交わした。そして、次期学習指導要領のキーワード「主体的・対話的で深い学び」という「流行」に目が向けられる中、これまで私たちが大切にしてきた不易は何なのか、それを探り当てることも私たちに課せられていることを確認した。



私は、第3分科会心づくり部会に参加し、愛媛県内子町立小田小学校今永先生と、佐賀県神埼市立千代田東部小学校 小松原先生、お二人の「特別の教科 道徳」(以下「道徳」)の実践発表を拝聴した。今永先生の取組は、6年生の総合的な学習の時間と道徳をコラボさせた取組で、生命尊重の価値に焦点を当てた劇制作過程において、生命尊重と複数の価値とを関連付けた授業づくりであった。年間カリキュラムやイメージマップによる評価の工夫の在り方などについて、他県の先生方と議論を交わすことができた。低学年担当の小松原先生の実践は、道徳の授業における「発問の工夫」「話し合いの設定の仕方」「振り返り」の3点について、学校全体で取り組んでいることをわかりやすく説明された。とくに、発問は題材を黒板に書いて、いきなり「登場人物はどうして〇〇をしたのだろう」とめあてを設定するのではなく、イラストなどで、「最初と最後で登場人物の表情が大きく変わったわけはどうしてだろう」など、興味や関心を高める工夫を紹介されており、大変参考になった。

二日目は、総会に引き続き、大会テーマである「不易と流行」について考えるシンポジウムがあった。特別活動の元教科調査官である杉田洋先生は、掃除や学級会、クラブなどの特別活動は、日本の教育の大きな特色であり、活動を通して、児童生徒たちに「意思決定」と「合意形成」の体験を繰り返していくことが大切であると強調された。一方、「特別の教科道徳」創設の中心的な役割を果たされている元教科調査官 押谷由夫先生は、これからの道徳の授業において、人格の基盤となる道徳性の育成を図る、モラル・アクティブ・ラーナーを育てることが大切だと述べられた。そのためには、問題解決的な授業や体験的な学習を工夫するとともに、子どもたちは自己評価を行ないながら自己理解・他者理解を深めつつ、先生方には短期・長期の視点から子どもたちの良さを評価していただきたいと力説された。

毎年この時期に開催される大会だが、たくさんのプレゼントをいただいた二日間だった。